

工業建設と農業建設については、従来は各企業ごとに勝手まちな計画をたてていたが、数年前からこれらをすべて Gosstroy の指揮下に入れ、基準を作って統制した。例えば、モスクワの西南地区には1棟の建築物の中に織物工場とランプ工場を同時に含んでいる6万m<sup>2</sup>の建物が建設されたが、その建設期間は1年であった。

Gosstroy の中には都市人民の生活環境を豊かにするために公共建設委員会があり、都市計画、住宅、児童施設、文化施設などの設計、査定を行っており、また、この委員会は、Gosstroy の傘下の各研究所で作られる住宅、橋梁、住区などの標準設計をなるべく少くするように調整を行っている。この委員会に関連する Gosstroy の研究所には、住宅研究所、公共施設研究所、新建材研究所、建築構造中央研究所、コンクリートおよ

び鉄筋コンクリート研究所、工業建築研究所、建築経済研究所などがある。モスクワの都市計画については、別にモスクワ総合都市計画研究所があり、その所長は公共建設委員会の委員であるとともに Gosstroy の副会長である。

Gosstroy には公共建設委員会のほかに、農業関係では農業建設委員会があり、また機械化による労働力を減らす目的で建設機械製造委員会などがある。また、建設に関するソ連のアカデミー(学会)も Gosstroy の指揮下にある。(以上は、昭和38年7月30日、Gosstroy の副会長の1人でかつソ連邦の大臣でもあるカラバエフ(KAPABAEB)氏とわれわれ視察団の特別会見の内容を中心にまとめたものである。

(筆者、建設省住宅局)

## 最高学術研究機関としてのソ連邦建設建築アカデミーについて

田 村 明

### 1. アカデミーの組織について

ソ連邦建設建築アカデミーは、ソ連邦の建設および建築の分野における最高の学術機関でモスクワに所在している。1958年現在において名誉会員5名、正会員76名、会員候補114名で、内部に一連の会議(学術研究調整会議、学術会議、建設・建築会議、編集出版会議)と外部組織として18の研究所、そのほかに各地に支部、支所、博物館、図書館、建設および建築常設博覧会をもっている。

建築・建設アカデミーは他の設計機関との十分な連絡をはかり、標準設計の徹底的導入をはかるため、1962年11月の決定によってすべてソ連邦国家建設委員会(Gosstroy)の指導の下におかれるようになった。

そのほかウクライナ共和国には連邦建築建設アカ

デミーのウクライナ支部が独立したウクライナ共和国建築建設アカデミーがあり、各共和国にはこのような独立したアカデミー又は支部がおかれているようである。

連邦アカデミーの組織については十分な資料がないが、ウクライナのアカデミーの組織の詳細は表のとおりである。連邦アカデミーの組織も大体同様ではあるが、勿論地域的な特徴であるドンバス炭田地帯建設科学研究所といったものはなく、都市計画、住宅計画、工業建築、公共建築、建設組織、新建材、建築構造、鉄筋コンクリートなどの諸研究所がある。各研究所は普通1000人~1500人の陣容を有し、それぞれ極めて設備のととのった立派な実験室を持っている。

アカデミーの付属になる建設、建築常設博覧会は、モスコウ市内南部にあり、材料の生産過程、各種建材、パネルの製造工程などが実物や模型で極めて要領よく示され、さらにプレハブのモデル住居の実物や模型、工場、水力発電、鉱山、港湾といった広い分野の展示が広大な会場に常設されている。

アカデミーの研究所、モスプロジェクト等の設計機関、調整機関としてのGosstroyおよびその内設の委員会等では、同一人物が兼任するケースも多いようで、行政、研究、設計が有機的に行われている。頭脳労働に対しては一方的な命令や強制的調整ではなく、むしろ相互に関連をもちあい、研究者もまた実際活動に従事しているようである。

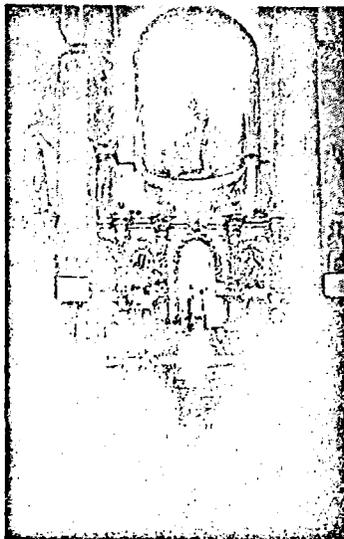
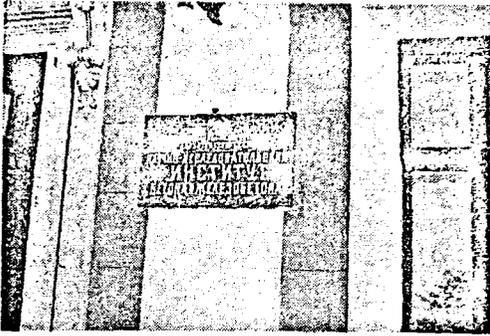
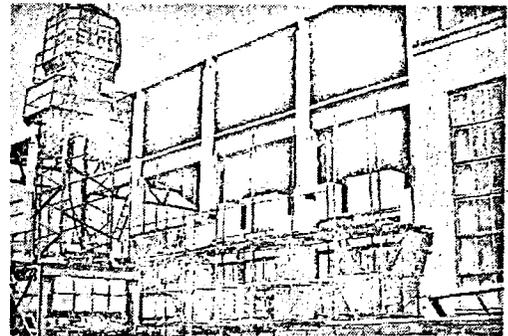


写真-33 キエフソフスキー建築博物館



写真—34 ソ連邦建設建築アカデミー 建築構造中央研究所およびコンクリート鉄筋コンクリート研究所（同じ建物の中にある）



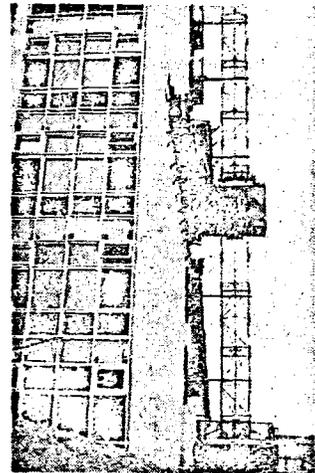
写真—35 同研究所の新築中の実験室



写真—36 リガ建築設計研究所にて



写真—37 リガ建築設計研究所にて



写真—38 同研究所の新築中の実験室



写真—39

## 2. アカデミーの活動について

アカデミーのうちいくつかの研究所の内容、その活動の一たんについては別にのべるとおりである。こゝでは問題の対象が極めて具体的、実際的である。勿論大きな研究機構を有している各研究所においては極めて基礎的な科学研究が行われてはいるが、最終的に要求されていることはあくまでも、実用化であり、生産コストの切下げであり、この手段としての徹底的な規格化である。このため実際設計を担当している各設計研究所（設計研究局）とは極めて深いつながりを持ちながら活動をすゝめ

ており、場合によっては標準設計の作成はじめ具体的設計活動を行うこともある。

また単に新規のものを追求め、常に競走相手の動向に左右されるようなことはなく、同一テーマについてかなりの長期間徹底的に研究を行って、単なるアイデア開発や、一時的な派手さではなく、地道に生産活動に乗るようにすゝめてゆくのも一つの特徴であろう。

しかも研究は各研究所で多角的にすゝめられながら、一つの統一をもっている。たとえば材料研究所で、プレハブ建築における熱材料の材料的性質を研究し、構造研究所でパネル式プレハブの構造面の研究をすゝめると、住宅研究所では標準設計などプランの問題のほか、断熱材料や構造の点も又、具体的な住宅への適用という点から研究をすゝめているといった具合である。とくにプレハブ問題はあらゆる研究所で、それぞれの角度からの研究が行われ、一つのテーマの集中的研究活動は社会主義国ならではのと思わせる。

このような設計研究活動の行政的な管理機構として、設計・科学研究活動および標準設計立案機関管理局がゴストロイの中におかれており、アカデミーには調整会議がある。研究テーマには国家的政策がダイレクトに伝達されてきている。しかし個々の研究活動については極

めて自由でのびのびと活動を進めているようで、若い学生の提案であっても直ちに实际的に利用されることもある。

### 3. アカデミーの意義と理解

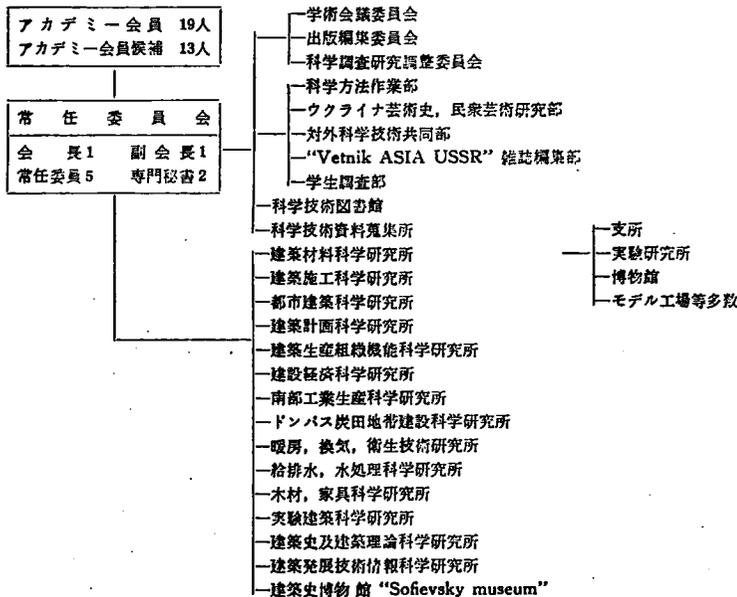
具体的な組織や活動は概略上にのべたとおりである。また個々の研究所の項でものべたとおりであるが、アカデミーがソ連邦建築建設活動の中で示めている意義を若干あげてみたい。

(1) 調査・研究・計画・設計の相互関連のカナメとして、

具体的計画・設計は通常、各共和国（モスクワやレニングラードは市）の下にある設計局が行うが、実際的には調査・研究・計画・設計の段階で各部門の緊密な連携を必要とする。この場合アカデミーの下にある中央研究所は調整的な役割を果たした調整の基礎になる研究設計を行っている。したがって単に学問のための研究活動ではなく、むしろすべてが実現につながるもので、科学・技術面においての最高の指導的役割を果たしている。

(2) 現場施工の保障の機能として

ウクライナ共和国建築建設アカデミー組織図



ソ連邦内での建築現場は、日本の建築現場を見なれている者にとっては全く粗雑なものである。プレハブの接合金物が曲ったり、つぎ目が割れていること位はあたりまえのことである。その上さらに熟練労働者の不足を告げ、より粗放的な建設を要求されている。

このような建設現場のみをみるとソ連建築の大量的ではあるが、極めて水準の低いのが目立つが、一歩アカデミーに入ると、その研究組織や、研究活動は極めて緻密、入念である。つまり現場での施工能力に本来の不器用さ、労働力不足から限界をあらかじめ見込してあり、なおかつ技術的な保障を与えているのが、アカデミーの役割であるように思われる。従って逆説に言えば、現場の粗雑性がアカデミーの水準の緻密さを示しているともいえるのである。

(3) 人材能力活用の適応性

現場の人たちのいかにも労働者向にひきかえアカデミーでは極めて知的水準の高い人々が集中されている。教育水準が急速に高まりつつあるとはいうものの、高い水準の技術者には限度があるだろう。それを広大な全土に散らすより、集中的にアカデミーでの活動を行わせ、現場や工場はまたそれぞれに適した能力と人材が配されている。すべての面においてそうかもしれないが限られた人材能力をそれぞれに適した面で極めて能率的に活用する。そのために中央にこのような高度のアカデミーを必要としていると思われる。

以上すべて人の面も物の面もそれぞれ有効な生産的な活動のために配置され、それが活動の能率性を保障している。アカデミーは象牙の塔ではなく、人と資材を有効に使うための最高機関であるともいえる。

—写真 田村 吉洋氏—  
(筆者、環境開発センター)

## 1964年～65年における研究計画と、研究成果の建設工業・建設資材工業への導入計画

山本和夫・川上玄

◀1964年～1965年度・科学調査研究・計画および科学技術成果、国民経済導入計画▶の中に、建設工業および

建設資材工業部門において研究を行い、また、その成果の導入・定着を実現すべき基本的課題が定められてい